史料紹介

エリザベス・ギャスケル『マイ・ダイアリー』②

笹川真理子　訳

一八三五年　十月四日　日曜日　夜

この前この日記を付けてからちょうど二ヵ月経ちますが、あれ以来あの娘の「心も身体も」共に成長したと思います。あの娘はこれまでの天候変化で体調をくずし、私は現在の食事療法の一環として、離乳の必要性を知りました。今ではあの娘は、くず粉でとろ味をつけた肉汁を食べています。この食物であの娘は力をつけることでしょう。

未だにひ弱な子で、歩くのが遅れていますけれど。でも、私はあの娘がよちよち歩こうとしているのを、誰からも急かされることのないよう望んでいます。なぜなら、私は子どもを見るにつけ聞くにつけ、子ども達は自分の足で歩き始めるほどに強くなったと自覚する時には、絶えず自分の力を試そうとするものです。それに自然と促されるまでは無理強いするのは、もっと悪いことだと思うからです。

あの娘は背はあるのですが、あの娘の年にしては小作りな子です。そして、あの夏の忌わしい病気以来、とてもか弱く見えます。（そして、ああ実際そうなのです）この冬はあの娘にフラン

ネルのチョッキと長袖の服を着せ、外に出たくなる程良いお天気の日以外は、戸外によく出るよりも、換気の良い部屋に置いておくことにしましょう。

あの娘はしばらくの間に歯が八本生え、あともう数本生えつつあるようです。恐らく歯が生え揃ったなら、もっと丈夫になるかもしれません。ああ、こんなにも消え入りそうな小さな宝物よ、私の愛が激しく執着し過ぎませんように。でも、私は心配のあまり、あの娘の命の儚さをはっきりと知ったにもかかわらず、やはり心配のために、日毎にますますあの娘にかかりっきりになっていくのです。

あの娘の性質は、この前書いた時からよくなってきていると思います。今はそんなに短気をおこしません。(これは恐らくこの夏の病気の置き土産だったのでしょう。)あの娘は七、八週間前にしていたような感情的な態度に逆もどりすることなく、ちょっとした期待はずれにもよく我慢できます。私はこうした期待はずれなどが少なければ少ない程良いと思うので、期待がほぼ間違いなく満たされる時でも、期待を煽らないようにしています。というのは、期待を募らせることは、(それは子どもにとっては常にとても強烈なものなので)有害であり、癇癪を引き起こす元にもなりかねないからです。

子どもが忍耐に慣れるためには、あり余る程の失望を今もこれからも味わわなければなりませんし、それは年毎に、また忍耐力がつくにつれて増えていく事でしょう。つまり私の言いたい事は、必要な程度の穏やかな、しかし厳然としたしつけを崩さないようにしながら、両親や子守りのほんのわずかな心遣いで避けられるありとあらゆる事には、注意が向けられ、除かれなければならないと言うことなのです。

私は、以前流行っていた幼児に試練を課すやり方は、好きではありません。子どもは我慢して、親の方は静かに見守らなければならないものも当然あるでしょうが、いたいけな子達に、これから出会う失望に慣れさせようと故意に失望を作り出すことは、まるで子ども達に味の濃い、口に合わない食物を与えるようなものです。それは大人の口には合って、実際に食べているかもしれませんが、子どもの虚弱なおなかではとても消化できないものです。

幼児期には、感情を抑制していく能力はまだ未発達な状態なうえ、子どもの感情が、特に感覚の直接支配下にある場合には、とても激しくなります。マリアンヌの気分や忍耐力が身体的状態によって影響を受けることには、とても驚かされます。私はこれについて、[1]クームの生理学から随分教えられました。ただ、気分の変化がどのような身体変化に対応するものかはわかりませんが。母親は小さな癇癪を歯の生えるせいなどにして、よく笑われることがあります。しかし、彼女を笑う人達が(私もかつてはその一人だったのですが)子どもを上手に扱ってきたとは思えません。

私は自制の習慣を身に付けなくてよいと言うつもりはありません。ただ、非常に幼い頃には、感情はある身体的状態のもとで起こるので、これは抑制されなければならないと思うのです。つま

り、特殊な身体状態を起こしやすいあらゆる徴候を取り除くには、私達が道徳的悪を起こしやすい道徳的徴候は何でも摘み取ろうとするのと同じ程、よく注意しなければならないと思います。私自身が、もっとこの信念に基いて行動できたら良いのですが。

睡眠不足はいつもイライラした気分にさせますし、また空腹感は飢餓感とは異なるとしても、同様の結果を招くものです。私はマリアンヌを、興奮から守られなければならない子として特記すべきかもしれません。けれど、小さな頬がバラ色に輝き、目を見開いて、そして子どもらしい唇がとても雄弁そうなのを見ると、本当にうっとりとしてしまいます。

あの娘は遊びや新しい経験がある量を越すととても疲れ、従っていつもよりむずかります。それに私には、あの娘の感受性がとても鋭く思われます。もし自分が心を使い真剣になっている時に、他人が笑っているのを見たり、それが冗談と気づかなかったりすると、あの娘は突然泣き出してしまうのです。あの娘を泣かせるのは、あの娘の（その時の）まじめな、物思いに沈んだ気持ちへの共感が足りないためにちがいありません。が、それはまた、病的な感情であることも考えなければなりません。もし私が扱い方を知っているなら、これはあの娘の幸せのために押えられた方が良い感情なのです。

また、思いがけない喜びによっても、あの娘は泣き出すことがあります。たとえば、二、三日留守であったパパを見たりする時など。涙は、こんなにも幼く、まだ十三ヵ月にもならない子の喜びを表現する一般的なやり方だとは思われません。私は、健康的な時には本当に美しく、そして病的な時には本当に痛ましいこのような感情の最良の扱い方に、全く疎いとつくづく感じます。恐らくあの娘の体が丈夫になるにつれて、あの娘の心も強靱なものとなるでしょう。

あの娘に笑いかけても、ほとんどきまって最後には泣かせてしまうことさえあるのです。あの娘は概して穏やかで、知らない人に対してもおじけることもなく、すばらしく持続的な注意力を傾けて、その行動や物事などに目を留め観察します。

あの娘は、おとなしさという点でとても女の子らしいと思うのですが、そのおとなしさは、心の働きが鈍いというのとは全く違います。あの娘は以前に比べずっと長く床にすわって、とても上手にひとり遊びをします。（このひとり遊びは、これまで実行が伴わず理論に傾きがちだったのです）私には、あの娘が非常に忍耐強いとは思われません。忍耐強ければ、もっと根気よく自分でおもちゃなどを手に取ろうとするでしょうに。でもこれは、身体的にできないのかもしれません。

あの娘の芸は多種多様です。—犬の泣き声、猫の泣き声、しっという音、名ざされた様々なものを指さすことなどなど……。

先日、ウィリアムは私に、君はあまり嫉妬深い性格ではないねと言いました。でも、彼は私のことをわかっていないと思います。マリアンヌは私と一緒にいるのが好きだと、私は望みますし、そう思っています。しかし時々、あの娘はベッツィーの方が

いいとはっきり示すのです。

ベッティーは私が見る限り、いつも親切で賢明で優しい子守りです。今夜、マリアンヌはとても疲れていました。ベッティーが膝まずいてお祈りをする間、私は喜んであの娘を抱いてあやしていたのです。ところがマリアンヌといったら、私が彼女を連れ去るのだと思って、突然私を押しやったのです。これは耐え難いことでした。でも私はこの気持ちを誰にも気づかれなかったと確信しています。なぜなら、ベッティーはあの娘の愛に十分値し、またその愛に報いていますし、それに私よりずっと体力があるので、いろいろ変化に富んだやり方であの娘を楽しませることができる人だと信じているからです。

時が経てばあの娘にも、母の愛が他人の愛よりもどんなに優っているかわかるでしょう。ですからそれまでの間、私は私の子の愛を他人と競い合うのではなく、あの娘の皆に対する、特に誠実で愛情深い召使いに対する善良な感謝の気持ちを育んでやるように努めましょう。

私はこの数日、あの幼い子の自制心の芽ばえをとても喜んでいます。あの娘は時々、熱すぎるかぬるすぎるお湯をつかわされてきましたが、それを嫌がっていました。ところが今週は、私が自分であの娘を洗ったり、適温かどうか(2)（85—90）温度計で測るために身仕度し、ベッティーも私も、あの娘の注意をそらして泣かせないように努めたのです。そしてこの二日間、あの娘は一生懸命泣くまいとして、涙をこらえてきたのです。ああ、これが本当に自制心の始まりでありますように！

主よ！ あなたに、この最愛の大切な宝物を心からゆだねます。あなたは私がどんなにあの娘を愛しているか、最もよく知っていらっしゃいます。私があの娘を溺愛しすぎませんように。そして、ああ！ もしあなたが万一、あの娘を「来たるべき不幸」へとお招きになることがあっても、玉のようなあの娘をお与え下さいましたのもあなたですから、私があなたのお手にあの娘をお渡しできますように。また私がどんなに心から、あの娘への努めを果たしたいと思っているかを、あなたが知っていらっしゃいますように。

私を無知からお救い下さい。ああ、主よ。私の良き志を強めて下さい。そして、今、恐れ震えながら知った深い信仰を、いつまでも持ち続けることができますように。しかし、もし私が正しく努めますなら、主は私とあの娘を祝福し、最後にはあの娘を正しく導き、母の誤ちを許してくれることでしょう。イエス・キリストの御名によって、あの娘に祝福がありますことを。

一八三五年　十二月二十八日　月曜日　夜

私のいとしい娘！　あなたのことを書くのは何と久しぶりのことでしょう！　でも、私は身体の具合いが悪かったのです。それにたぶん、私は怠けていたのですね。あなたに関する事はどんなことでもこうあってはならないのに。

マリアンヌはこの前書いた時より、ずっと丈夫になりました。でも、これには、あの娘への並み並みならぬ注意と、肉汁の中ににべ[3]を溶かすなどの―栄養のある食物―をとらせる必要があったのです。丈夫になるにつれて、あの娘の良い性質も戻ってきました。これは、少なくとも子どもがむずかる時には、何か身体的な問題があるという私の持論に一致しています。今やあの娘は怒る事があっても、すぐ落着きを取り戻しますので、私達はあの娘に反省の気持を持たせることに努めました。

それはほんの一瞬の事かもしれません。でも、あの娘が怒った時は、私達は厳しい（怒ったではなく）顔つきをして、時々手で顔をおおいます。これはいつもあの娘の注意を引くので、そうする事であの娘の小さな癇癪を押えるのです。あの娘が顔から手を引き降ろそうとすると、私はたいていこう尋ねます。

「マリアンヌ、我慢できなくてごめんなさいは」と。するとあの娘はちゃんと理解して、たいてい小さなうなずきの声を出して、私にキスします。

私が何か我慢するようにと優しく言う時には、あの娘は私の言う事をとてもよくききます。「ちょっとお待ちなさい。マリアンヌ。ベッツィーはすぐ来るわ」と言うと、あの娘はいつも静かになります。

というのは、一つには、私は実際そこにいない人が、あの娘のために何かしてくれるなどと言ったことはありませんし、できるだけ本当の事をあの娘に言うようにしているからです。もしベッツィーが夕食やあの娘の欲しい物を持ってくる前にまたぐずったなら、私はもう一度待つように言って、何かあの娘が喜ぶものを見せます。

あの娘は怪我をしても、めったにひどく泣きませんが、もし泣いた時には、私達があの娘に何かしら―絵、コップ、本―を見せると、すぐ泣くのを忘れてしまいます。私達はできるだけ、同情を示さないようにしています。

あの娘はとてもおなかをすかせている時でも、あまり物欲しそうにしません。それどころか、あの娘の手から取りあげるのでなければ、何でも自分の食べているものの一かけらとか一口を、私達にいつでも喜んで食べさせようとします。取りあげるなどと、そんなつもりはありません。あの娘の信頼心は力づくで形成されるものではなく、私達があの娘のささやかな権利にも良心的である事を見る事によって、自然と沸いてくるものだからです。

二、三週間前に、おばあちゃまがあの娘に甘いビスケットを送

って下さいました。最初、私はあの娘がこれらの贅沢品を一人占めしたい気持になるのではないかと心配しました。というのは、あの娘は今までに一度も甘いものを口にしたことはなかったからです。あの娘は私達が少しちょうだいと言っても、自分から進んでくれるのではなく、いやと言う事が時々あったからです。しかしそれも次第になくなり、今ではいつも気前よく分けてくれます。

もし私達が何か食物で、これはあの娘が食べるには適さないと思う時には、あの娘はその〝いけません〟を納得するとてもいい子です。あの娘はキスし、指さし、必死になって話そうとしますが、私達が〝いけません〟と言う時も泣いたりしません。でもこれは概して言えることで、もちろん、あまりいい子でない時もあるのです。

あの娘が一番きかないのは、お風呂の時と着換えの時です。あの娘はお風呂の間中、悲しそうな声をあげていますが、これは時時冷[4]たすぎる水の中へ入れられるせいにちがいありません。

あの娘は食事を終えるのが嫌いで、変な趣味ですが、底に来るのがいやなので、しばしば最後の二、三口を食べたがりません。

あの娘は一人っ子のせいか、少し他人に頼りすぎるようで心配です。たとえば、床にすわっていておもちゃがころがってしまった時、それをはって行って追おうなどとは考えずに、誰かに助けを求めて懇願するように見上げるのです。確かにあの娘の手足はとても弱く、もう十六ヵ月にもなるのに、つたい歩きもめったにしようとしないのですけれど。

あの娘はとてもパパが好き。パパの足音を聞くとパパと叫んで、けっして間違うことがありません。そして夕食後、部屋へ入ってよいという合図のベルを聞くと、あの娘は喜んで小躍りするのです。

あの娘は歩き出す前に話し出すでしょう。あの娘はかなりはっきりと「パパ、暗い、かきまわす、ふね、ランプ、本、お茶、そうじ」など、かわいそうにママを置き去りにして話すのです。

あの娘は私達が火をかき起こしたり、部屋の中のものを何か動かすと喜びます。

私は時々、あの娘が私達の話していることをどうしてあんなに理解し、また理解しようとしているのかとびっくりすることがあります。

たとえば、私はある日ビスケットについて話していたのですが、あの娘に私の話がわかって期待が煽られるといけないと思って、ただそれらを「今朝の朝食の食卓にあったもの」と、(その時は部屋の中に何もなかったので)言っただけなのに、あの娘は「ビス、ビス、ビス」と言って、ファニーの腕の中で躍り始めたのです。

あの娘は小柄[5]な子で、あまり丈夫な方ではないと心配しています。それで、私達はこの春あの娘を海岸へ連れて行きたいと思っています。ああ、私がいつも「[6]主、与え、主、奪いたまう。主の御名は讃むべきかな」という言葉を心に留めていますように！私は体が弱っていて、書くのにひどく疲れを感じます。そうでな

ければもっと書こうと思っていたのですが。神が私の最愛の子を祝福し、そしてこの母がまじめに努められますよう、お助け下さいますように。

（津田塾大学）

註

(1) Combe, Andrew, M.D. (1797—1847)
エジンバラ生まれの生理学者、骨相学者。
開業医からスコットランド女王付医師にまで出世。その著作は、簡潔で実例に基づいており良識に満ちていた為、人気を博した。ここでギャスケル夫人が読んだものは、
'Physiology applied to Health and Education' (1834) と思われる。他に
'Physiology of Digestion' (1836)
'The Physiological and Moral Management of Infancy' (1840)

(2) これは華氏で摂氏に直すと (29.4～32.2)°C

(3) isinglass (魚類の浮き袋から造ったにかわ) ゼラチン。

(4) ロバートソン (Robertson, P. "Home as a nest: middle class children in ninteenth-century Europe." In L. deMause ed. *The History of Childhood.* New York: Harper & Law, 1975) によれば、当時の英国病である〝くる病〟は刺激のない環境のもとでおこると考えられ、冷水による神経の刺激がくる病の予防に役立つと考えられていたという。従って、子どもから大人まで冷水浴が奨励されており、ギャスケル夫人も当時の慣習により冷水浴を実施していたものと思われる。

(5) 夫ウィリアムの弟サミュエル・ギャスケルは医師で、ギャスケル家の子ども達の健康に助言を与えている。この海岸行きもその一つ。海水浴も当時、健康維持のために好ましいと考えられていた。

(6) 聖書ヨブ記一章二十一節